

資本と言語

資本の言語

言語と資本

山本 亮二郎

考える目的

言語と資本の関係を紐解く—資本はなぜ言語に傳くのか—

書く目的

資本に内在する言語構造を解明し、資本をより良く、かつ巨大に取り扱うための理論を築く。

本稿の目的

本稿は、「資本と言語」「資本の言語」ならびに「言語と資本」を考察することを目的とする。資本と言語とは、資本と言語との関係性を意味し、資本の言語とは所与として資本が纏っている言語を指す。一方、言語と資本は、例えば『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（宗教と経済）や『公共性の構造転換』（討議と市民社会）等の着想に倣うまでもなく、歴史上、言語の誕生が当然に経済の先にあるのであって、その言語こそが資本を生んだと考えることが自然であろうとの助言と整理に基づく。

ここでは、言語行為論とコミュニケーション行為理論を参照し、それら理論の考察の入口に立ち、次いで、対話の「始祖」たるソクラテスに着目する。その後、起業家または資本家の言葉を紹介することでそれらの例証としたい。現に、資本は既に在るものとして捉え、その移動及び移転に果たすコミュニケーション行為が有する行為調整機能に注目するが、大実業家たちの創業初期や起業前夜の言葉を通じ、なぜその個人に資本が「集積」していったのかを読み解くこともできる。最後にベンチャーキャピタリストにとっての資本と言語を記し、今後の読書（研究）計画を付した。

いずれも、資本をより良く、かつより大きく取り扱うための原理を探ろうとする試みである。

本稿の初期的整理

言語＋意志＋発話＝資本

言語＋非意志＝非発話＝非資本

言語行為論・コミュニケーション行為論⇒資本調達

言語＋感動⇒資本

資本＝意志＋起業（事業活動）＋利潤又は資本調達

資本＋言語行為（発話媒介的行為）⇒資本家

資本＋コミュニケーション行為⇒財の交換、資本の移動

労働＋言語（学問）⇒資本

1. 言語行為論

J・L・オースティンは、言語には、他者に行為を促す一群の構文があることを発見した。

例えば、「考えるために書く」にはEMP 修了生が参加しています」という単に事実を述べる発言（発話）と、「考えるために書く」の課題提出期日は明日です」という発話とでは、その目的、達成される成果が明確に異なる。前者は事実確認的発話、後者は行為遂行的発話と分類される。この分類によって、私たちは正に「言葉で物事を為す」ことができるようになった。より正確に記せば、言葉によって物事を為しているという事実を自覚し、すなわち「ある出来事に」「言語を用いて」「当事者とし

て参加する」という、言語行為の機能が明らかになったのだ。

オースティンはもう一つ重要な発見をしている。それは、行為遂行的発話が内在する「力」(エネルギー)についてである。

行為遂行的発話に紐づく言語行為は、発話行為、発話内行為、発話媒介行為の3つに分解される。加えて、発話内行為には以下の5類型があるとまとめている。判定宣告型(評価・判決など)、権限行使型(命令・警告など)、行為約束型(約束・保証など)、態度表明型(感謝・祝福など)、言語解説型(主張・解説など)である。上の「「考えるために書く」の課題提出期日は明日です」という発話を例に、「力」に注目して考えてみよう。

第一の発話行為における力は、発話者による課題提出の「期日の明示」(意味)である。第二の発話内行為において、発話者は「期日の遵守」(効力)を促しており、さらに第三の発話媒介行為として、その効力が実際に遂行されるために、講座運営者としての「威厳」(効果)が発揮されている。もし発話者が、公式に単位認定をする教授であれば、その力はより明確である。つまり、課題提出日が明示され、期日の遵守を通知するだけでなく、「その期日を守らなければ単位は得られません」「従ってあなたは卒業できず、就職を棒に振ることになるかもしれず」「留年すれば、さらにもう一年分の授業料を納める必要もあります」というように、学業における純粋な習熟や達成を超えて、遂行させるための威力、文字通り人生が台無しになるかもしれないという恐怖によっても、期日は期日として認識され、遵守されることになる。そうでなければ、実際にあらゆる制度の運用や維持は困難であろう。

この発話媒介行為こそが、言語と資本の相互関係を考察する上で極めて有効な概念である。というよりも、それこそが、資本と言語という問いが筆者に発生した直接的な契機の一つだった。すなわち、資本の移動(=資本の調達、資本の投資)の場面で、この発話媒介行為が重要な役割を果たしているのだ。

例えば、ベンチャーファンドの運営者(GP、ベンチャーキャピタリスト)が機関投資家から資金(資本)を調達する際、接待攻勢や贈答による奴隸的朝貢的態度で関心を引くことはできるだろうか。端的に、それでは資本は動かない。昨今のガバナンス強化の風潮からも逆効果であろう。また、起業家がベンチャーキャピタルから資金(資本)を調達しようとする時はどうか。子犬のように仰向けに腹を見せて恭順の姿勢を示すのだろうか。それでは絶対に資本は動かない。

資本を移動させるには、必ず、言語行為が、それも、この発話媒介行為が十分に有効に機能していなければ、自分(自社)の銀行口座に資本が送金されることはないのだ。

資本を移動させるには、ひれ伏すのではなく、知性と威厳と意志と感謝を、言語行為によって縦横に示すことが必要なのであって、それ以外に、資本を移動させることは不可能だ。

オースティンの功績は、言語の構造の中に、行為を促す構文があることを発見し、単にそれを理論化したというだけではない。言語には、人の行為を促すことを通じて、人の行為の先に横たわる何らかの物(物質、資本)を、物理的に移動させるエネルギーが備わっていると明示したことにより、解釈において、結果的に言語と資本とを急速に接近させることに貢献したのだ。[1][2]

2. コミュニケーション行為の理論

言語と行為に関するオースティンの言語論を、人と人との間のコミュニケーションとして捉え、議論の理論としては勿論だがそれに留まらず、商業の場面における様々な交換や、具体的な資本の移動の場面においても使用可能な行為論へと発展させたのは、フランクフルト学派第二世代と称されるユルゲン・ハーバーマスである。

マルティン・ハイデッカーがナチ支配期に行った講義『形而上学入門』を読んだ「衝撃」を、24歳の若さで「ハイデガーとともにハイデガーに反対して考える」と題して『フランクフルターアルゲマインエ』紙に寄稿し、爾後今日に至るまで、哲学、社会学に留まらず現実政治においても多数の論争や討議に彩られてきた。ここで取り上げるコミュニケーション行為理論においては、あまりに理性主義的であり理論としての有効性は疑問視されてきたと言える。それは、一見すると正しい。

なお、最近のハーバーマスの言辞、またはそれへの批判等については下の(1)から(3)を参照。

(1) ホロコースト批判しガザ虐殺を支持するヨーロッパ哲学の倫理的破綻 米コロンビア大学教授ハミッド・ダバシ氏が指摘 (2024年11月7日『長周新聞』)

<https://www.chosyu-journal.jp/kokusai/32614>

(2) ドイツ現代史研究の取り返しのつかない過ち——パレスチナ問題軽視の背景 京都大学人文科学研究所准教授・藤原辰史 (2023年2月23日『長周新聞』)

<https://www.chosyu-journal.jp/heiwa/29293>

(3) 『全体主義の克服』 マルクス・ガブリエル 中島隆博 (2020 集英社新書)
ただし、ガザ虐殺については、ガブリエルにもハーバーマス同様の批判がある。

さて、ハーバーマスは、〈人〉と〈言葉〉、〈言葉〉と〈物〉という関係性におけるオースティンの革命的言語理論を、〈人〉と〈人〉との間主観的関係における行為そのもの、つまりコミュニケーション行為において使用可能な枠組みへと転換しようと試みる。エドムント・フッサールやアルフレート・シュッツの現象学にも接近するハーバーマスにとって、討議(コミュニケーション行為)が行われるその場こそ、貨幣や権力による行為調整が可能であるシステム(経済や行政)に対置される、システムをコントロールし得る生活世界であるからだ。

討議とは、たんに論争と呼ばれる戦略的な言葉の応酬ではなく、「日常的な行為やコミュニケーションの流れがいったん中断され、それまでさして意識もせずに口にされていたことが、命題として公式に取り上げられ、その妥当性を議論されること」を指す。このことに「人間の言語的コミュニケーションの中でも特別な位置を与え、いわばコミュニケーションの究極理念を体現するあり方」(119頁)だとする。一方、討議の対照を成す戦略的相互言語行為の背景には命令や脅しがあるとしている。

そして、そのコミュニケーション行為は社会生活に不可欠な3つの役割を果たすとされている。すなわち、第一に、了解(意思疎通)を可能にすることにより文化的伝統を受領し更新する。第二に、言語による行為調整に従事し、人々の社会的連帯を作り出す。第三に、個々の人間が社会で成長し社会化するための中心的役割を果たす。

つまり、コミュニケーション行為は言語行為(談話)ではなく、行為そのものなのである。言語ではなく、言語を媒体とした行為を扱うこの理論は、市場原理による売り手と買い手とを客観的に同調させること、つまり、商談の成立という行為調整にも有効であると記されている(153頁)。

一方で、近代社会におけるサブシステムとして独立分化する「国家装置」(権力による制御)と「経済システム」(貨幣による制御)、その総体であるシステムが、この生活世界をも植民地化することに強く警鐘が鳴らされている。効率性と公平性を目指して確立される福祉国家は、階級闘争を制限する役割を果たし、あらゆる行政サービスは、討議の担い手たる市民を、次々に、楽々とクライアントへと転化させていく。それらを通じて傷つき縮小している言語空間を、マルクスによる労働力の物象化を意識して、生活世界の植民地化と呼んでいるのだ。

現在の地点から一見すると、システムの産物であるかに見受けられる資本。その資本とはそもそも何であるかを歴史的に考察すれば立証可能な通り、または、現在においては巨大な産業資本家であってもその創業期に遡り、あるいは、もっと分かりやすく眼前のスタートアップ起業家の実態に目を凝らせば、資本とは、この生活世界から生まれ出た、文字通り人(起業家、商人)の血と汗と涙の結晶そのものであることが分かる。起業家の具体的な言葉として4及び5で例示するように、企業理念、創意工夫、商品開発、起業家精神、イノベーションといった事象は、ことごとく生活世界の産物そのものなのである。

資本と言語との避けがたい問いが立ち現れる根本理由は、おそらくここにある。つまり、資本とは、コミュニケーション的行為が作用する生活世界に、歴史的に帰属(内在)してきたからこそ、その生成と発展、あくなき拡大に言語が重要に機能し、言語にのみ傳くのだ。システムによる生活世界の植

民地化という侵食は避け難いとしても、生活世界の側は、言語行為、そしてコミュニケーション行為を正しく理解し使用することにより、元々は自らが手にしていたはずのこの資本を、より分厚いものとして「調達」し「投資」することができるはずだ。なぜならそれは、ここにあったものだから。

スタートアップと言語について一つだけ記すなら、ベンチャー企業の多くは事業に失敗する。時には、殆どが失敗すると言っても良い。その時に、起業家はどのような言葉を選ぶのだろうか。最近もこのようなことがあった。長期に渡り巨額の損失を計上し続け、著しく資本を毀損し、事実上経営権を失った起業家が「この数年は厳しい経営が続いていましたが、新たな体制のもとでまた来月から頑張ります」とのメッセージを発した。そこには、厳しい経営の責任と原因が自らにあるとの自覚が皆無である。このような言語と態度に資本が集うはずはない。この起業家がまず第一に発すべき言葉は「私自身の経営の至らなさにより、このような結果となりましたこと、大変申し訳ありませんでした」という、そのような一言であろう。

資本を引き寄せる言語というものが実際にあり、つぶさに観察すれば、実は言語こそが資本を生んでいくことを理解できるはずだ。

[3]

3. ソクラテス文学

「対話」が有する社会への影響をより理解するために、ここでは、遙か古に「対話」に殉じたという、ソクラテスの人物と言説を考察したい。その言葉は、なぜアテナイで殺され、それなのになぜ、現在も脈々と生き続けているのだろうか。

紀元前 399 年初春に刑死したソクラテスとは、一体どのような人物だったのであろうか。彼こそは、有罪を受けて死刑になった人類最初の哲学者である。ならば彼は、いかなる罪を犯したのか。彼による、いかなる言語が、権力者たちの逆鱗に触れたのか。そして、ソクラテス本人は自らの言葉が、死してなお二千数百年後にまでも語り継がれ、哲学や大学の始祖となるほどの影響力を持ち得るなどと、微塵でも知っていたのだろうか。

容易に想像できるように、当時その生は奇人として見做され、その死は衝撃を持って迎えられたと記録されている。

「生は、「彼は人びとから拳骨で殴られたり、髪の毛を引っ張られたりすることもしばしばであったし、また多くの場合は、馬鹿にされて嘲笑されたのであるが、それでいてしかし、彼はこれらすべてのことにじっと我慢して耐えていた」」。[4] (p. 135)

「死は、「政治の場で活躍しようと考えていた青年プラトンに大きな衝撃を与え、政治から距離をとって哲学から現実を見る決断を強いる。(中略)プラトンら仲間たちは(ソクラテスの死後)不安を感じて一時隣国メガラのエウクレイデスの元に避難」」[5] (p. 433) した。

ソクラテスの投獄と刑死は、神々への不敬と、人々(若者たち)を拐かした(墮落させた)という二つが罪状であった。そして、その生を、殺されたその言葉を、膨大な対話の数々を、弟子たちが営々と編み、語り、再現し続けてみせたもの、それがソクラテス文学だ。主な書き手であるプラトン、クセノフォン、パイドン、アンティステネス、アイスキネスはじめ 14 人の著者が、250 巻 200 篇ほどの作品を発表したとされ、最大はやはりプラトンで、生涯に 30 冊もの対話篇を執筆した。それこそがプラトン哲学なのである。財界人の多くも好んで読む、あたかも政治哲学の金字塔のようである古典、かの『国家』さえも、事実としてその一冊に過ぎない。偉大な師を葬った権力、その権力を体現する国家の本質を、彼はどうしても解明しなければならなかったのだ。

一方、ソクラテス本人は、生前に一冊の書物も、一行の文章も残さなかった。その理由は現在においても明らかになっていない。

「ソクラテスが投獄され殺害されることに至る直接的な契機となった、革職人で保守派の政治家アニュトスとの対話も、プラトンは見事に書き残している。アニュトスは後のソクラテス裁判の原告の一人で、実質的にソクラテス攻撃を指揮した人物である。「徳」は伝えられないということの例示とし

て、親しい有力者たちと共に侮辱されたと感じたアニトスは、対話の最後で、この国では人に危害を加えることは容易だと忠告する。」[6] (p. 132)

実際に、このアニトス、詩人メレトス、弁論家リュコンの連名で告訴状が提出されたのだ。その書面は後々までメトロオンの公文書館に保管された。

紀元前 469 年にアテナイ・アロペケ区で、石工と助産師の息子として生まれたソクラテスは、貧乏を苦にせず、擦り切れた上衣を纏い、成人するにつれ、いつもアテナイの街の公共広場や体育練習場で対話を交わし、問いを発していたという。「身分の低い者や奴隷や女性でも構わずに対話した」[5] (p. 377) という。

そして、その主な内容は「徳」についてであった。[7] (p. 9)

フリードリッヒ・ニーチェによれば、ギリシアの本来の哲学者とは、ソクラテス以前の哲学者を指す。つまり、ヘラクレイトス、デモクリトス、プロタゴラスらこそが正真正銘の高貴な哲学者であって、対話を駆使し、情け容赦もなく攻撃し、事実を暴露しようとする平民ソクラテスやそれを文学にするプラトンら弟子たち、全ソクラテス学派は「ユダヤ人」であって、賤民の復讐に過ぎない。彼らは上流社会に対する第一の剣士であり、その転覆をこそ自ら「徳」と呼んだのだ。

ここには、ニーチェの直観、本能、恐怖が如実に表明されている。すなわち、言語が纏うエネルギー、対話が有するパワー、それらが齎す巨大な権力、圧倒的な闘争、来るべき悲劇、否、歴史の反復そのものを見抜いていたのだろう。そして、事実として、自ら（遺族）も加担したと見做され得るナチスとヒトラーの出現によって、図らずもそれを証明することになるのだ。それは、ソクラテスの対話が故に現れたのではなく、正にソフィストの演説であり、激情そのものだったのだが。[8]

文脈の質も次元も異なるが、言語が産業資本に与える初期の運動を、ニーチェとは違う形で記述したカール・マルクスらの思想については、本稿後半の「資本の部」で詳述することになる。

さて、それではソクラテスの対話には、一体どのような特徴があったのだろうか。殺された（正確には服毒である）、その「対話」のことである。

第一に、それは現場の文脈に依存して一度限り交わされる言論であり、真理を探求して抽象理論に収束するものではなく、相手の性格や立場に応じて議論の仕方を変えたのだという。それは、ソフィストたちの弁論術にも一見似ていた。だが、同一作品を各地で披露するソフィストのパフォーマンス（詩の朗読）とは本質的に違っていた。（第一から第四まで[5] (p. 378-379) 要約）

第二に、理論の是非や論破が目的ではなく、個々の相手の信念を取り出すことに重きを置いたのだという。そして、その相手の吟味とは、自らの「不知」を確かめてする自分自身の吟味でもあって、攻撃性と破壊性に主眼を置くソフィストとは違った。

第三に、対話は短いやり取りを基本とする一問一答であった。この点も、法廷や議会で長大な言論を一方向的に朗読するソフィストの弁論術とは違った。一方、プラトン『エウテデモス』が戯画化した詭弁的問答を用いる者や、帰謬法による問答形式を用いる者もあり、ソクラテスの「論駁（エレンコス）」という方法にはそうした背景、それらとの対決もあった。

第四に、プラトン、アISKイネス、アリストテレスが書き残すように、ソクラテスは常に、自らが「知らない（不知）」という立場から相手を吟味したのだ。ⁱ 実はこれこそが、ソフィストたち（知識人）を最も苛立たせ、時に激昂させたものと想像される。なぜか。

「なお論駁とは、相手が定立した特定のテーゼを、一問一答で複数の命題を問うことでその複数命題を受容させ、次いで推論により当初のテーゼとの矛盾を突く論法である。相手はテーゼか命題のどちらかを撤回することになり、行き詰まり（アポリアー）に陥り自らの不知を自覚するのである。論駁以外にも、ソクラテスは帰納法、類比、架空対話など高度な言論技術を駆使していたことを後にアリストテレスらが発見した。」[5] (p. 381-382)

重ねて問おう。こうして日頃からひたすら問いを発していただけたソクラテスは、なぜ殺され、そして、それにもかかわらず、その言語は二千数百年もの時を越え、現在も生き続けているのだろうか。

それはおそらく、今日でも、哲学に限らず、探究を通じて「学説を提示する営み」であるところの、

あらゆる学問のあり方そのものへの懷疑が根本にあるからだろう。「徳の教師を名乗り」「あらゆることに反論可能だと豪語し」「権力者のための言論技術を標榜する」「博識を自負し社会で尊敬された」ソフィスト（知識人）[5] (p. 380) と、その知識人らと一体となって治世に務めた権力者たちの存在そのものに、悉く疑いを投げかけることになるからである。問うとは、闘いを挑むことである。だから、彼は殺されたのだ。

一方、一見独自の哲学体系のように見えて、その実ソクラテス文学の一ジャンルを極めたとも言えるプラトンの思想が、あたかも哲学という学問そのものの基礎をなし、のみならず、学園アカデメイア（紀元前 387／386 年頃に、プラトンが私財を投じてアテナイ市街北西の神域で開設した）として後の大学の発祥にすら連なるといふなら、この「文学」の持つ力の偉大さに慄く以外にない。現在のアカデメイアたるここで学ぶ私たちは、二度と再び巻き戻すことのできない真剣勝負の一言一句を、その対話を、殺されるかもしれない畏れと、二千数百年の悠久の歴史に想いを馳せながら、語り、目撃したのだろうか。

「対話」「言語」が文学と思想（哲学）を生み、思想が商業へと発展し、商業（経済）が「資本」を形成し、その資本の蓄積や移動を、再び「言語」が担うメカニズムをさらに解明していこう。

ⁱ 一方、クセノフォンは、ソクラテスが有益な知を「授けている」様も描いた。20 世紀に入ると急激に評価が低下したというこのクセノフォン説は、いかなる不都合があったのだろうか。ただし二十一世紀にかけて再評価されているという。[5] (p. 477) [8]

なお、第3節は、4月に入学した京都芸術大学通信制大学院で書いたものを転載した。

4. 「宇宙に衝撃を与える」

そう言うのけ、人々の記憶に深く突き刺さる、これらの鮮烈な言い回しを頻繁に用いることで、「言語と資本」というこの秘めたる問いを、言わば初めて眼前に立たせ、明確に机上に置いてみせたのは、他ならぬスティーブ・ジョブズだった。

しかし、「それ」が発せられたのは一体いつのことだろうか。

大枚をはたいた Macintosh のあの伝説的な記者発表時か？負けが込んだ Lisa 開発チームへの鼓舞か？全世界を埋め尽くす iPhone のコマーシャルを通じてか？膵臓癌を発した後のスタンフォード大学でのスピーチか？そのどれとも違う。

ジョブズにおいて「言語と資本」構文が現出するのは、年間を象徴する人物として『TIME』誌の表紙を飾ってからでも、起業家として名を馳せ、大実業家として功成り名を遂げてからでもないのだ。

おそらく最も古いものでは、12歳のジョブズ少年が、シリコンバレーの名士たちに片っ端から電話をかけ、偶然電話口に出たビル・ヒューレットに「周波数カウンターのための部品を分けて下さい」と言ったとの記録が残されている。

しかし、この微笑ましいエピソードを、「言語と資本」構文を用いてももう少し具体的に、より詳細に再現したならこうなる。

「あなたがヒューレット・パッカード社を創業した、かのヒューレットさんですか。私はスティーブ・ジョブズという者です。現在私は、世界的にも画期的な周波数カウンターを製造しています。しかし、ご存知の資材不足と半導体の高騰で開発に遅れがでている。ついては、この部品を毎月数億ドル分、貴社が仕入れた2倍の価格で購入させてもらえないか」。

この一文は無論フィクションである。しかし、ジョブズがヒューレットに対して言ったことは、自社が製造した周波数カウンターなるものの売り込み（セールス）ではなく、「俺がお前から買うがどうだ？」という「仕入れ」についてだったことは間違いない。

経済誌が行う全国の前取ランキングでも毎年高い評価を得ている銀行の、親しい銀行家と接していて気付かされることがある。それは、決して預金を募ったり保険を販売しようとするのではなく、本業である融資は当然として、時に投資も行うが、それより前に「まず当行で利用してみましょう」と述べ、自らが関心を有した企業の商品やサービスを、実際に購入してみせるのだ。極めて有能なこの銀行家の態度と、交渉に臨むジョブズの姿勢とはどこか似ている。正に、オースティンの行為遂行的発話や、ハーバーマスのコミュニケーション的行為そのものである。

その日ヒューレットは舌を巻き、快諾しただけでなく、即座に彼を自社のサマーインターンに招き入れた。「12歳の起業家」であるジョブズがそこで繰り広げたであろう様々な珍事や、社員たちに放ったであろう数々の悪態を思い浮かべるだけで、微笑ましい気分になる。

かくしてジョブズは、中学一年の時には既に、パロアルトの大立者を向こうに回して、正に宇宙に衝撃を与えていたのだ。

さらに、そのような言語、そのような言語構文を駆使し続けることで、この貧しいシリア移民の子であり私生児であった男は、世界で最も影響力のある人物へと成り変わっていく。天才的に言語行為を操ったのみでなく、誰から学ぶまでもなく間主観的言語の本質を直感的に知り、多数の商談や会議や記者会見を通じて自らの言語能力の高さを証明し、言語こそが人々や資本を動かし得ることを深く理解していった。事実、細部に至るまで徹底的にリハーサルを繰り返し、彼ほどプレゼンテーションに拘った起業家はいないとされている。

スティーブ・ジョブズこそ、言語と資本との間に潜む深い関係を、自らが生み出したスマートフォンや後の SNS を通じて、これだけ広範な同時代の人々に、リアルタイムで明示した最初の人物だと言えるだろう。

5. 日本の起業家（資本家）の言語と行為

それでは、日本の起業家（資本家）たちはどのように資本の言語を用いたのだろうか。

今ではグローバル企業となり、資本主義の象徴として理解されている、資本の担い手たる実業家たちが発する言葉には、とりわけ、創業直後の言葉には、無名の若者の生活世界が、まさに言語を通じて、巨大な経済システムへと発展していくことをまざまざと想起させてくれる。

渋沢栄一

「個人の富はすなわち国家の富である」。

「富貴に驕ってはならない。貧賤を憂えてはならない。ただ知識を磨き、徳を高めて、真の幸福を求めようとする事」。

「学問は一種の経験であり、経験はまた一種の学問である」。

「水溜りや滴（しずく）を集めれば大河になる」。^[10]

豊田佐吉

「因ニ発明トハ、全ク此ノ世ニ無キ事柄ヲ頭ヨリ揉ミ出スコトニテ、我ガ領土内ニテ埋立開墾スル等トハ異リ、祖先ノ脛又ハ国ノ脛ヲ嚙リナガラ、幾分ノ功績ヲ世ニ残スト云ウガ如キ意味ニアラズ。全ク我ガ心身ヲ苦メテ、新事業ヲ搾リ出スコトナリ。

故ニ他ノ土台ニ依ラズシテ、社会国家ニ有益ナル独特ノ物ヲ案出シ得レバ、即チ太平洋ニ新日本領土を築キ上ゲタルト同様ナルモノト云フヲ得ベシト考ヘタリ（『発明私記』）

実に凄まじい考えである。「全ク此ノ世ニ無キ事柄ヲ頭ヨリ揉ミ出ス」の一節は、いかにも実感がこもっている。だがそれより、ここで注目したいのは、発明が先ではないということだ。社会国家に尽くしたいという気持ちがあつて、その手段として誰の世話にもならず独力でできる発明が一番良いと考えつくのである」。^[11] (p. 26-27)

松下幸之助

「産業人の使命は貧困の克服にある。社会全体を貧しさから救って、富をもたらすことにある」。彼は例として、水道の水を取り上げた。ここに生活にとって不可欠の水道水という製品があるが、非常に安く生産され流通しているので、だれでも手に入れることができる。「企業人が目指すべきは、あらゆる製品を水のように無尽蔵に安く生産することである。これが実現されれば、地上から貧困は撲滅される」。^[12] (p. 127)

本田宗一郎

「1922 年（大正 11 年）尋常高等小学校を卒業すると、東京・本郷の自動車修理会社アート商会へ丁稚奉公に（中略）。1928 年（昭和 3 年）、のれん分けの形で浜松市にアート商会浜松支店を開設しました（中略）。「理論を基礎から学ばねば」と、浜松高等工業高校（現静岡大学工学部）の聴講生となり、そこで得た知識を活かしてついに大量生産に成功。しかも、この間にピストンリングに関する特許を 28 件も取得したのです」。^[13]

井深大

「長野県の須坂から東京に戻ってみると、当時、私の住んでいたのは東北沢であつたが、周囲はすべて焼け落ち、そのなかに私の家だけが立派に残っていた。

わが家の前に立ち、焼け野原を見回しながら、これからなにをしようかと思ったものであつた」。

^[14] (p. 119)

「井深は「発明少年」が長じて「町の発明家」になった人である。いわゆる産業用の電気機械には興味を示さず、民生用の電気製品、つまり、世の中のすべての人々が使えるものを作り出すことにのみエネルギーを費やした。自分が発明したものが、あらゆる人たちの家庭生活を豊かにすることが願いだった」。^[15] (p. 146)

「あの設立趣意書にしても、井深のプロテスタントとしての精神を頭において読み返してみると、まことによくわかる。個人個人が自由闊達に夢を実現しようといった井深のソニー精神は、敗戦で傷ついた日本を新しい自由で明るい国に再建するためのもの以外の何ものでもない。」^[15] (p. 161)

飯田亮（次頁）

筆者による面談（後に飯田氏とセコム広報の許可を得てインタビュー記事として書き起こし、2002年12月、日経新聞を京都で購読する全世帯に配布された。なお、同席された文中の経営者は、その後大手コンビニエンスチェーンのCEOに就任し辣腕を振るった）

柳井正

「縁故で入った会社を9ヶ月で辞めて宇部に出戻り、父親が経営する2つの店を任されただけの、「町の紳士服屋の主人」でしかなかった。しかし、既製服の仕入れと販売という非効率な商売の中で、徐々にベーシックな商品に対する期待を抱くようになり、品質の良い商品をリーズナブルな値段で毎年売っていくことができれば儲かる、と考え始めるようになる。わずかな社員数の（若く頑固な柳井氏を古くからの社員は嫌い、一人を残し全員が辞めてしまったという）零細企業の社長でしかなかったその頃から、「ひょっとしたら、将来は1兆円の売上がある会社を率いることができるかもしれない」と思い、誰にも言わなかったが「世界を相手に商売をしようとずっと考えていた」という。途轍もない夢を掲げ、若い頃から準備し、勉強を続けてきた者にだけ、チャンスは訪れると書かれている」。[16]筆者によるインターネット書評から抜粋

出井伸之

「日本の社会を見てみると、金融機関は全然個人のために働こうとしていませんでした。そこで、ソニーが個人向けの銀行、損保、生保をやろうという話になったのです。お金持ちがこんなにいるのに、その面倒をみられていない国は日本以外ないぞとみんな思っていた。世の中が必要としている、それがポイントじゃないでしょうか。

僕は課長時代、よく周りのみんなに会社でちょっと会議をやろうぜって誘っていました。そこで将来どういうビジネスがいいとかプレストをしていたのです。「この新規事業にはこの人が向いているのではないか」とか言っていました。社内でそんな話しをして、全くけしからんことですね（笑）。会社で事業を作ったり壊したり、日本だったらこういうのが向いているとか考えて、「風」を読んでいたのです」。2010年6月1日 筆者によるインタビューから抜粋

孫正義

「最近、おばあちゃんの「正義よ、何ごとも人様のお陰やで」という言葉をよく思い出します。僕の一家で一番苦労したのはじいちゃん、ばあちゃんでした。日本に渡って来たばかりのころは言葉も喋れないし、財産もなければ頼れる人もいない。むしろマイナスのハンディキャップがいっぱいあったんじゃないかと思っています。5つか6つのころの僕は、おばあちゃんが引っ張るリヤカーの後ろに乗ってチョロチョロついて回ったものですが、そんなときに、おばあちゃんが「人様のお陰」と僕に言い聞かせる。幼いころは、その言葉に反発を覚えたものですが、年を重ねていくにつれ、「なるほど、そうだなあ」と思うようになりました。今はおばあちゃんが言っていたのはこういうことかと、とてもよく理解できるのです」。[17]

ベンチャー起業家 奮闘日記

山本亮二郎

○月○日 東京でセコム創業者の飯田亮さんに会う。一度目は、飯田さんが審査委員を務める、ある起業家大賞の授賞式でのごとだった。ほんの少しだけお話を聞いて頂いた。二度目は東京支店の若手3人を連れて、原宿のセコム本社を訪問した。じっくりとお話を聞くことができた。三度目には、このところ私がお付き合いを頂いている、ある一部上場企業の元役員をご紹介させて頂いた。その後、セコムの事業と接点のありそうな、私の好きな名古屋の上場企業の社長を担当部署に紹介して頂いたり、福祉関連のイベントをご案内したりと、時々ご連絡させて頂くようになった。

先だっての「プロジェクトX」を見た方も多いかも知れないが、この間に私が感じたこと、学んだことを、なるべく飯田さんご自身の言葉を引きながら、記してみたい。京都で経営を志す多くの方々に、読んで頂きたいと思う。

「企業経営で一番大切なのは、カルチャー、組織を作ること。組織は人で成っている。だから人が重要だ。ただし、人は連れてくるものではなく、人は創るもの。つまり組織を作るということは、人を創るということだ。」

では、カルチャーはどうか？

「カルチャーは、自分そのもの、創業者のカルチャーということ。『卑しいのはダメだ。経営者が卑し

い会社は絶対にダメ。大切なのはトップの人格。能力ではない。哲学、人生観が重要だ。』

どんな事業を起すべきか？

「社会の人が喜ぶものでなければ存在価値はない。いい仕事でなければダメだ。根底に流れるものが何なのか大切。企業を創るなら、きれいな会社を創りなさい。自分は若い頃から、人に追随したことも数えるほどしかない。企業はそうしたところから崩れていく。」

上場については？

「海外との提携は、最初のうちは自分が週に一回は行っていた。一回は、でかいケンをした。結果的にそうでなければうまくいかない。海外でパートナーを選ぶのは、最後は勘だ。」

「企業は絶対に儲けなければいけない」と言い、現在創業の準備をされている上場企業の元役員に向かって、「絶対に成功しろよ。いい日をしている。必ず成功しろ」と気合を入れた。大変な迫力だった。

戦後の創業経営者の中でも、飯田

「自分でやれよ」と起業家は言った

「利益が50億円以上になってから上場すれば十分(注)。ポケット(株数)は限られているのだから、よく考える。最近の上場は、みんな恰好よすぎる。小器用にやっているとダメ。スマートにやる奴が多いが、事業というものはスマートにできるものではない。カミソリで切るのではなく、ナタで切るようではダメだ。経営者はもっと汗水を飲まなければダメだ。」

提携については？

「タイアップして何かやるのは安直な手法。スマートに見えるけど嫌い。ジョイントベンチャーはお互いのフロンティアが合うのでうまくいかないことが多い。ゴルフの打ち出し角度のようなもので、ちょっと曲がっても林の中に入っちゃう。買取するならOK。提携という考え方は、(企業経営とはカルチャーを創るものなんだから)本来あり得ない。」

さんはおそろしく最高峰のお一人ではないかと思う。私がこれまでお会いしてきたあらゆる人間の中で、最も巨大で、最も強烈な印象を受けた方だ。同席された元役員も大変な実績ある方だったが、二人のやりとりを聞いてずっと考えていたのは、二十代の半ば頃から頭を離れない、私自身の「創業」についてだった。自分自身に、語るべき理念と、語るべき意志と、強(たけ)いまぬ情熱があるのであれば、何を述べるべきかあるのか。私が飯田さんに繰り返し言われたのは、「ベンチャー(=ベンチャーキャピタル)なんかやってんな。自分でやれよ」ということだった。

この二年半、まだ形のない、自分自身もベンチャー企業のベンチャーキャピタルとして働いてきた



飯田 亮さん

セコム創業者、飯田亮さんに会う

ことは、本当に得がたい経験だったと思っている。そのようなチャンスを与えた当社の代表にはとても感謝をしているし、自分の投資先への強い愛着もある。ファンドの出資者に対する責任も、日々重くなっていく。

しかし、いつかは必ず、自分自身の「カルチャー」を問うてみたい。飯田さんはこうも言っていた、「なるべく多くの人に会いたい」と。飯田さんほどの成功を収めた方が、つまり、誰にも負けない強烈な「カルチャー」を有する方が言う言葉として、少し意外な気もしたが、何故かとてもうれしかった。

(注) 最近のスピード公開、あるいは小型IPOという現象は、個人的には、必ずしも否定すべきでないと思っている。もちろん、飯田さんの言われる意味はもう少し精神的な

ことで、新興市場の整備云々の評価とは違う次元のお話だった。また、株数(創業者のシェア)については、資本政策を工夫すれば、今は大きな心配はいらなくなっていると思う。

やまもと・りょうじろう

1968年7月生まれ。人材会社でのベンチャー向け採用支援を経て、2000年6月にベンチャーキャピタル入社。アーリーステージを中心に14社の投資を実行し、3社の非常勤取締役を務めている。2001年11月より東京支店勤務。2002年5月からファンドマネージャー。『僕れたベンチャー起業家について書きたい』という思いから、タイトルを『ベンチャーキャピタリスト日記』ではなく『ベンチャー起業家日記』とした。(r-yananoto@fvc.co.jp)

図1 「ベンチャー企業化奮闘日記」『別冊週刊京都経済』2002年12月の記事

6. ベンチャーキャピタリストにとっての資本と言語

筆者は18歳から10年間肉体労働で生計を立て、その間22歳から26歳までの4年間に大学の夜間学部で学んだ。最も関心を持ったのは社会理論の講義で、中でも、ユルゲン・ハーバーマスの『公共性の構造転換』から『コミュニケーション的行為の理論』に強く惹かれた。底辺労働者として歯を食いしばり学費を払っていた者にとって、現実社会から遊離した大学の学問は、真剣さを欠く浮世離れしたものに映った。もっと言えば、中学から高校までの学校教育で、個性や感受性、何より大切な批判精神を蝕んでいった(と感じていた)元凶こそがここにあり、ここがその再生産工場ではないかと思えた。自らの浅学非才を棚に上げれば、社会の矛盾を問い、挑みかかるような学問は皆無であった。だから、ハーバーマスの批判理論に惹かれたのだろう。担当教員の講義内容も素晴らしかった。

卒業後は住み込みの新聞配達員2年と、その後数社の会社勤めを経て、国内ではまだスタートアップという言葉も聞かれなかった2003年5月、34歳の時に「起業」「創業」に特化して投資する専門会社を、ワンルームマンションの一室で起こす。その後22年間、9つのベンチャーキャピタルファンドを組成し、100社以上への投資を実行し、成績は上場13社(独立前の投資を一部含む)、年内にさらに3社が上場を予定し、上場以外に取得価額の2~74倍で16回EXITした。

参考に、最近組成した山口県でのファンドについて、2025年3月4日『日本経済新聞』を144頁に添付した。小ぶりの地域ファンドと言え、他府県では設立から8年半でファンド総額を110倍にした実績もある。

さて、そのベンチャーキャピタルとは、資本を、資本のまま調達し、資本のまま提供（投資）し、投資後には社外取締役就任などし、様々な経営的な支援や関与を継続することで投資先の企業価値を高め、最長 10 年ほどの期間を経て、IPO により資本市場で、または持分のみを相対で、時に経営株主持分を含め M&A により大企業等に、保有する株式を売却して収益を得る事業である。具体的には、純キャピタルゲインの 20% がベンチャーキャピタル会社またはベンチャーキャピタリストの取り分となり、これを成功報酬と呼ぶ。残りを、ファンドの出資者である組合員に、出資比率に応じて分配する。これが第一の報酬である。

「資本のまま調達し」について、当社では、メガバンクグループ、大手銀行、多数の地域金融機関、証券会社、総合商社、複数の IT 上場企業、地域の有力企業、個人、自治体、政府関連機関等から出資を受けてファンドを組成している。つまり、ベンチャーキャピタルとは、少なくともその当初は、自ら資金（資本）を有しているのではなく（その必要はなく）、資本を保有するエスタブリッシュメント（資本家）たちから出資を受ける活動を行い、その資金調達に成功した暁に、初めて投資家（ベンチャーキャピタリスト）になることができるのだ。

そして驚くべきことに、ベンチャーキャピタルは、この調達した資本の総額に対する約 20% を、第二の報酬である管理報酬として、10 年間に渡り分割して受領し続ける。例えば、100 億円の資本を調達（ファンドを組成）すれば、平均して毎年 2 億円程度の報酬の支払いが、契約で 10 年間約束される。1,000 億円のファンドなら総額 200 億円、毎年 20 億円である。資本を調達するコストとして 20% の利息を支払うのではない。返済額のうち 20% は担保を積むのでもない。新株等を発行して、20% の経営権を売り渡すのでもなくだ。

ここにも、資本と言語に関して考察すべきテーマが横たわっている。

なぜなら、この管理報酬の源泉たる、資本の調達、提供（投資）、成長支援、売却という行為の、およそ全ては、言語、それも発話媒介行為または間主観的発話によってなされているからだ。

西京銀行がイノベーションファンド発表、地元9社も出資



西京銀行以外に地元企業9社も出資した（4日、山口県周南市）

西京銀行は4日、山口県内での新事業創出を目的としたイノベーションファンドを設立したと正式発表した。西京銀とファンド運営会社のほか、プラント機器製造の徳機（周南市）や船舶用ポンプの大晃ホールディングス（田布施町）など地元の9社が出資した。スタートアップ育成や新規事業を促し、地域経済の活性化につなげる。

設立した「西京イノベーションファンド」の資産規模は3億円で、うち2億円を西京銀が出資した。地元企業の出資について、松岡健頭取は「企業の課題などを持ち寄ってもらい解決できれば、他にも応用可能なイノベーションを起こすことが期待できる」とした。

運営はベンチャーキャピタルのPE&HR（東京・千代田）が担い、出資も実施した。投資先企業のうち、12社が新規株式公開（IPO）した実績がある。

山口県の地域課題解決につながる技術を持つ、県外のスタートアップも投資対象となる。PE&HRの山本亮二郎社長は「まず地元の企業や自治体、大学などと連携してもらう。その後に拠点開設などを検討してもらうことが理想」と述べた。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

図2 『日本経済新聞 電子版』2025年3月4日の記事

25 年間（うち 22 年間は独立して）従事してきたベンチャーキャピタリストというこの職業は、資本に関わるものであり、上述の通り、すべからく、資本のみに関わる仕事であると言って良い。現代における資本とは、マルクスが究明しようとしたそれとは違い、つまり、生産手段の私的所有も、賃労働の搾取による剰余価値論も物象化も介在せず、ある日突然、下層労働者が資本家へと成り代わることさえ可能である。同義反復的だが、それを実現せしめるもの、それ自体も資本であり、そして言語なのだ。

その代表的手法は、新たに資本市場に上場する企業が、証券会社と証券取引所による厳格な審査を受け、緻密な目論見書を元に新株を発行して資金調達（IPO（新規公募増資））を行うことであり、その際に保有株式を売却することで、起業家は、上述の通りベンチャーキャピタルも、キャピタルゲインを得ることができる。

しかしながら、資本への成り代わりが起きるのは、何も IPO によってのみではない。その遙か以前に、信用と金融技術と組合管理における高度な経営手法を通じて、ファンドを設立したその瞬間に、人（下層労働者）は資本家に成り代わるのだ。

つまり、例えば下層労働者は、1) 言語を駆使してファンド資本を調達し、2) その時点で 20% を報酬として受領し、3) 加えて、資本市場で新たに資本が調達される際（＝IPO）に、ファンド資本（保有株式）を売却して巨万の富を得ることが可能であり、その間約 10 年間、資本取り扱いに関わる全ての職務を司るもの、繰り返すが、それこそが言語であり、しかも、その多くは「発話」、それも「行為遂行的発話」なのだ。資本調達における投資家との交渉場面において。その資本をベンチャー企業に投資して後は、年間何百回もの取締役会や株主総会において。

大学を卒業して 30 年近く経ったある日、ふと「今の言語行為論がうまくいった」「今の発言が受け入れられなかったのは発話が戦略的過ぎたからだ」などと自らの間主観的発話を反省的に考察する自分がいることに気づき、当時関心を抱きながらも、一方でその有効性にはやはり疑問を感じざるを得なかったあの社会理論が、実社会の実践を実際に抽象できていたことに驚きを受けた。

資本と言語の関係は、それだけで膨大な研究対象であり、高度に発達したこのファンド資本主義は、例えば貨幣や銀行などと遜色のないほどに人類社会に与える影響は大きく、とりわけイノベーションとアントレプレナーシップ、つまり人類の未来と社会の進歩に直接的に関与している。従って、MBA 的にのみではなく、もっと哲学的に、もっと社会学的に、もっと経済史的に、この資本主義そのものを深く抉り、近代経済社会の生成を言語とともに解き明かした上で、理論化していく必要がある。

7. 今後の読書と研究計画

資本の生成について、またそれに先立つ銀行（貨幣）の信用創造について、マルクスを丹念に読み歴史的に考察することは、本稿目的の前提を知る上で有効であるが、ここでは扱えなかった。

言語論については、デリダの『有限責任会社』や、タルドとデュルケームの論争に、また、プラグマティズムの始祖でもあるパースの概念にもヒントがありそうに思えたが、ここでも読書は追いつかないままだった。討議については、各言語論のみでなく、フッサールやシュッツもよく理解する必要があるそうだったが、到底不可能だった。余談だが、批判理論とともに昔学んだアルフレート・シュッツは、銀行家（銀行協会職員）として実務に当たりながら終生社会理論の研究を続けた。

こうした問いを解明するためには文献研究は避けて通れないが、また、読んでみたい本が溢れていくばかりだったが、底辺労働者であった一生活者として、ワンルームで始めた零細な起業家として、資本を扱う専門職業人として、学問を愛する者の一人としても、読書に溺れることなく、自ら考えてみることを大切にしていきたい。たたかいを挑む言語とは何かを。メモのために、ノートとペンさえあれば、それはいつでも始められるのだから。

最後に、口先だけで一向に文章が進まない拙い考えを親身に聞いて頂き、多くの的確なご助言と

示唆をいただいた小野塚先生に御礼を申し上げます。そして、高い専門性と誠実さで毎回続々と論文を提出されていた、偶然旧知であった垣本さんと坪田さんのお二人に刺激を受けました。
皆様ありがとうございました。

〈資本〉

マルクス『資本論』他、エンゲルス
ルカーチ『歴史と階級意識』、グラムシ
ステッドマン・ジョーンズ『階級という言語』
シュンペーター
デヴィッド・ロスコフ『超・階級』
ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』
森元孝『ウェーバー後、百年 社会理論の航跡』『貨幣の社会論』
天野統康『民主主義の真の原理』（銀行史として）
デヴィッド・グレーバー『負債論』
クリスティアン・マラッツィ『資本と言語』
ピケティ『21世紀の資本』、サンデル

〈言語、間主観的言語〉

オースティン『言語と行為』
フーコー『言葉と物』、フィリップ・サボ『フーコー『言葉と物』を読む』
ハーバーマス『意識論から言語論へ』『公共性の構造転換』（再読）『コミュニケーション的行為の理論』（再読）
フッサール、アルフレート・シュッツ『生活世界の構造』『社会的世界の意味構成』
ヴィトゲンシュタイン、パース『言語行為』、ソシュール『一般言語学講義』
デュルケーム『社会学的方法の規準』、キルケゴール
ガブリエル・タルド『経済の心理学』、夏刈康男『タルドとデュルケーム』
デリダ『有限責任会社』
ローティ、チョムスキー

〈意志について〉

カール・レーヴィット『ヘーゲルからニーチェへ—十九世紀思想における革命的断絶—』
ニーチェ『権力への意志 上・下』、ヘーゲル？

〈ソクラテス文学〉

クセノフォン、プラトン、アリストファネス、アリストテレス
アルキダマス『書かれた言論を書く人たちについて、あるいはソフィストについて』

〈その他〉

白井聡
國分功一郎
岡本裕一郎
小野塚知二

参考文献

- [1] J・L・オースティン『言語と行為 いかにして言葉でものごとを行うか』（講談社学術文庫）
- [2] 大澤真幸『言語行為論をどう評価するか』（ソシオロギス）1985年9号
- [3] 中岡成文『ハーバーマス コミュニケーション行為』（講談社）
- [4] ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝（上）』（岩波文庫）
- [5] 納富信留『ギリシア哲学史』（筑摩書房）

- [6] プラトン『メノン—徳について』（光文社古典新訳文庫）
- [7] プラトン『ソクラテスの弁明』（光文社古典新訳文庫）
- [8] ニーチェ全集 1 2『権力への意志 上』第二章 2 ギリシア哲学の批判（ちくま学芸文庫）
- [9] クセノフォン『ソクラテスの思い出』（光文社古典新訳文庫）
- [10] 渋沢栄一『論語と算盤』角川ソフィア文庫及びネット記事
- [11] 野口均『トヨタを創った男 豊田喜一郎』（ワック）
- [12] ジョン P. コッター『幸之助論』（ダイヤモンド社）
- [13] 『本田宗一郎』（浜松・浜名湖だいすきネット）<https://hamamatsu-daisuki.net/industry/greatmen/greatmen06.html>
- [14] 井深大『「ソニー」創造への旅』（グラフ社）
- [15] 郡山史郎『ソニーが挑んだ復讐戦』（プラネット社）
- [16] 柳井正『柳井正の希望を持とう』（朝日新聞出版）
- [17] “「正義よ、何ごとも人様のお陰やで」—孫正義の人生の背骨になった祖母の言葉”（致知出版社）2024-12-03https://www.chichi.co.jp/web/20241203_sonn/